

大分大学教養教育科目「美の世界」（全学年）授業 実践報告

荻野， 哉
大分県立芸術文化短期大学美術科：准教授

<https://hdl.handle.net/2324/4798359>

出版情報：オンライン授業の地平：2020年度の実践報告，pp.32-32，2021-04-30．雷音学術出版
バージョン：
権利関係：Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives International



1. 授業の目的と概要、授業内容、成績評価の方法等

本科目は、18 世紀半ばにヨーロッパで成立した、美と芸術と感性を論じる哲学としての「美学」について解説しつつ、われわれの生活経験の中で生まれるさまざまな課題を手がかりに、学生自身の思索も深めることを目的としている。2020 年度前期の授業は、教科書に指定した佐々木健一『美学への招待 増補版』(中公新書、2019 年)の第 2 章「センスの話」、第 3 章「カタカナのなかの美学」、第 4 章「コピーの芸術」の内容に沿いながら、美学史上の主要な学説(アリストテレス、カント、ベンヤミンなど)や具体的な芸術作品をめぐる理論を適宜紹介する形式で進める計画であった。

成績は、小レポート(全 5 回)を 30%、期末レポートを 70%の割合で評価したうえで、出席状況も考慮の材料とした。教育学部・経済学部・福祉健康科学部の全学年が履修可能であり、文字どおりの「美の世界」にはなじみが薄い学生も多いという事情から、小レポートは知識の定着や確認に加えて、受講生の意見の表現も積極的にながす課題としている。

筆者は 2016 年度から非常勤講師として本科目を担当しているが、2020 年度は Zoom と大分大学の LMS である Moodle との連携による双方向型のオンライン授業をおこなった(本務校の業務との兼ね合いもあり、オンデマンド型は選択しなかった)。前期の開講は遅れていたが、5 月から全面的にオンラインで実施すると連絡があり、4 月下旬に教育支援課の担当者から Moodle の利用方法について説明を受けた。この時点で Zoom はかなり身近な存在となっており、Moodle と連携させながら講義をおこなうことにさほど違和感は覚えなかった。

まず資料に関しては、レジュメおよび書籍のコピーなどの pdf ファイルを前日までにアップロードし、受講生には教科書の内容と関連させながら予習するように求めた。出欠の確認は、事前に伝えている各回のパスワードを、授業開始後チャットに再入力することでスムーズになった。学生からの質問はチャットで受け付け、講義の流れをふまえながら適宜応答するように心がけた。結果として前述の授業計画をほとんど変更せずに進め

ることができたが、2019 年度まで鑑賞していた美術館にまつわる映像教材は使用しなかった。

レポートも資料と同様前日までに概要を告知し、授業時に作成上の注意点をあらためて説明した(期末レポートは参考文献の書き方などがポイントとなるため、例年どおり説明にかなり時間をかけた)。Moodle で課題提出に不慣れな新入生が多いことや、通信環境によって送信に不具合が生じるケースを配慮して、期限から若干遅れて受信したレポートも評価の対象とした。なお、小レポートは 5 回とも翌週の授業で全体の講評をおこない、受講生の学習意欲が向上するように努めた。

2. 今後の課題・可能性、もしくは受講生の反応等

出欠については、遅れて入室した受講生が「出席」扱いになっているかを授業後にメールで確認してることがあった(遅刻許容時間は 20 分に設定していた)。また、学生からの音声と映像の配信は控えるように求めたが、これを守れていない場合が時々あった。全体的には、筆者・受講生の双方とも、回が進むにつれて「新たな授業様式」の雰囲気慣れていった感がある。

レポートに関しては、あらためて自己と向き合いつつ思索するという状況下に置かれたことから、「センス」や「コピー」といった概念を新たな視点で考察しようとする意欲的な姿勢が例年よりも目立った。その一方、図書館の利用制限もあって書籍にアクセスしづらい環境での受講を強いられたためか、参考文献を明記するレポートが少なかったことは今後の課題として挙げられる。対面授業においても Moodle を有効に活用しつつ、電子書籍や pdf 形式の学術論文の情報を積極的に伝える必要性を感じた。